



👁️👁️ みどころ

コード (CODA) とは、“Child of Deaf Adults” の略語で、「ろう者の親を持つ子ども」のこと。そのため、トロール漁業を営む父、母、兄を持つ“コード”の女の子ルビーには通訳系の重責が！海でも大変、陸でも大変、コードとして魚と格闘しながらの彼女の学園生活は如何に？

なぜコードのルビーに音楽の才能が？それは謎だが、そんなテーマでアカデミー賞作品賞、助演男優賞、脚色賞の3部門にノミネートされ、3つともゲットしたのが本作。「そんなお涙ちょうだい映画はノーサンキュー！」と見逃していた私は、凱旋上映で鑑賞。

ろう者は会話や歌をどうやって聴くの？それが不可能なことはわかっているが、本作では健聴者ルビーの歌声が魅力的。それは一体なぜ？また、それをどんな演出で？

なるほど、これはよくできている。導入部から中盤をそう思いながら観ていた私は、後半からクライマックスにかけて大粒の涙が。そして、手話を交えながら歌うオーディションでの『青春の光と影』を聴くと思わず号泣。やっぱり、こりゃ必見だった！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■凱旋上映で感動！やっぱり本作は必見だった！■□■

本作は2021年サンダンス映画祭で史上最多の観客賞、審査員賞、監督賞、アンサンブルキャスト賞の4冠をゲット！第79回ゴールデン・グローブ賞でも作品賞（ドラマ部門）、助演男優賞の2部門にノミネート。さらに、第94回アカデミー賞でも作品賞、助演男優賞、脚色賞の3部門にノミネートされていた。日本ではその段階で公開されたので、これは必見！そう思ったが、同時に、「聴こえない家族の『通訳』係だった少女の知られざ

る歌声。それは「やがて家族の夢となる」というキャッチフレーズを読むと、「こんな、お涙ちょうだい映画はもういいのでは」と考えて劇場へ行かなかった。

ところが、2022年3月28日に発表されたアカデミー賞では、作品賞には私が予想した映画ではなく、本作が選ばれたうえ、助演男優賞と脚色賞も含めて見事三冠をゲット。日本では、濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』（21年）が国際長編映画賞をゲットしたことに話題が集中した。同作は、「作品賞、監督賞、脚色賞の3部門は無理で、国際長編映画賞のみ」という私の予想は見事に的中したが、本作については完全に私の予想が外れてしまった。その結果、『ドライブ・マイ・カー』の凱旋上映と同じく、本作も凱旋上映されることになったため、劇場へ。

本作導入部から中盤にかけては、「なるほど、なるほど。よくできている」と思いながら観ていたが、後半からクライマックスにかけて、少しずつ涙が。そして、主人公がバークリー音楽大学のオーディションで、私の大学時代のヒット曲『青春の光と影』をアカペラで歌い始めると少しずつ涙が大粒に。さらに、主人公が観客席に座る両親と兄の姿を見つけ、手話を交えながら歌声を響かせ始めると、思わず号泣！やっぱり、本作は必見だった。

■この女性監督に注目！コーダとは？■

昨年の第93回アカデミー賞の監督賞では北京生まれの女性監督クロエ・ジャオが、作品賞では『ノマドランド』（20年）（『シネマ48』24頁）が大きく注目された。そして、今年の第94回アカデミー賞監督賞は、『パワー・オブ・ザ・ドッグ』（21年）の女性監督ジェーン・カンピオンが受賞したが、本作の女性監督シアン・ヘダーは監督賞にはノミネートされなかった。しかし、主演女優エミリア・ジョーンズを見出し、ルビーの父、母、兄の3人にホンモノのろう者を起用したシアン・ヘダー監督の視点は鋭い。そんな女性監督にも注目！

本作のタイトルになっている「CODA（コーダ）」は、“Child of Deaf Adults”の略語で、「ろう者の親を持つ子ども」という意味。日本国内には2万2千人ほどいるらしい。本作のパンフレットには、自分自身もコーダだという、五十嵐大氏（ライター、エッセイスト）のReview「本作は、ひとりのコーダの生き様を通して、違いとどう向き合っていくのかをぼくらに問いかける」がある。たしかに“コーダ”という存在は今年73歳になった私も全く知らなかったものだ。

■シアン監督の視点は？ろう者と健聴者の接点は？■

本作は2014年のフランス映画『エール』のリメイクだそうだが、なぜシアン・ヘダー監督はそんなテーマを取り上げたの？それはパンフレットの「シアン・ヘダー監督インタビュー」にある次のことで明らかだ。

この映画は、突き詰めればとてもシンプルな家族の物語ですが、私たちが触れたことの

ない文化やコミュニティについて描いています。多くのシーンは音がありません。そこがこの作品のおもしろいところです。登場人物は、アメリカ式手話をしながら一言もしゃべらずに座って会話をします。だからこそ観客は見方を変えざるを得ません。この視点の変化を自分の生活の中に持ち帰ってもらえたらうれしいです。そうすれば、ふだんの生活でも手話で会話をしている人を見たときに、自分とは関係のない人とは思えなくなるかもしれません。

さらに彼女は、「最初から耳の聞こえる俳優を雇う気はありませんでした。」と語っているが、それはなぜ？それは、本作を観れば誰でもすぐわかるので、本作は必見！そして、シンプルな家族の物語として感動し、涙を流せばそれで十分だ！

本作で使われているのはアメリカ式手話。したがって、4人家族の中で唯一の健聴者であるコーダのルビーは、そのアメリカ式手話で父母と自由に話すことができるが、私を含むほとんどの観客にはその内容は全くわからない。映画には字幕という便利なものがあるから、それによって観客はこの4人家族の会話を理解できるが、ストーリー展開の中にある周りの人たちは？もちろん、シアン・ヘダー監督はそれをわかったうえで本作に挑んでいるわけだが、さあ、本作における彼女の視点は如何に？

■□■ 4人家族の絆は？ルビーのストレスは？葛藤は？ ■□■

もし私がこの4人家族の周りにいたとすれば、気の短い私はイライラして席を立てしてしまうかもしれない。そう考えると、ルビーは常にろう者である3人の家族と、健聴者である周りの人たちとの通訳係をしなければならぬのだから大変だ。しかも、ルビーたちの家業は代々、船に乗って5キロほど沖合に出て魚を取るトロール漁業を営んでいたから、コーダとして通訳係を兼ねるルビーの役割は、安全管理上からも大変かつ重要だ。海上でも陸上でも日夜そんな奮闘を続けるルビーのストレスや葛藤は如何に？

本作前半では、男たちに交じて海上でも陸上でも魚と奮闘するルビーの姿が顕著だが、学校に行けば、また一人自分の部屋に入れば、彼女はごく普通の女の子のはずだが、さて自分の青春は？恋の展開は？この点、さすが女性監督シアン・ヘダーの演出によるルビーの描き方は巧い。ルビーには仲のいい女の子もいたし、いかに魚臭いとはいえ、ルビーに好意を示す男の子もいたはずだ。

新学期が始まる中、密かにルビーが憧れる対象だった男の子マイルズ（フェルディア・ウォルシュ＝ピーロ）と出会ったルビーは、マイルズと同じ合唱部に入ったから、そこから“小さな恋のメロディー”が始まっていくの？いやいや、コーダであるルビーと家族との絆はメチャ強いし、仕事上のウエイトもメチャ大きいから、ルビーの学園生活も青春もそんなに甘いものではないはずだ。

■□■ V先生との出会いはルビーの新たな地平線に！？ ■□■

私は松山市の八坂小学校4年生の時から合唱部に入り、それなりの才能を発揮。NHK全国学校音楽コンクールにも参加したが、所詮その程度のレベルだった。ところが、本作の

ルビーは、マイルズに釣られて(?)入っただけの合唱部で、すぐにV先生(エウヘニオ・デルベス)に才能を見出されたからすごい。しかも、それが無料での個人レッスンの提供やパークリー音楽大学への推薦入学まで繋がっていく姿を見ていると、V先生のルビーへの期待の大きさがわかる。そのストーリー展開の中で、実はルビーは音楽が大好きで、自分の部屋ではいつも音楽を聴いていたことがわかるのだが、なぜルビーにそんな才能が備わっていたの?私にはそれがよくわからないため、私はその点では本作の脚本が不自然だと思わざるをえない。もっとも、本作ではV先生の面白いキャラクターのためか、それがあまり不自然に思えないところがよくできている。

個人的に提供される特別レッスンはあくまでV先生の好意と期待の現れだが、魚との格闘とそこでの通訳係に忙しいルビーは二度も三度もレッスンに遅刻するので、そのたびに大目玉。そんな中、ルビーは、「パークリー音楽大学に入学したい」と両親に伝えたが、両親は「家業にはルビーが必要だ」と猛反対。いくら「私は歌うのが好きなの」と訴えても、全く理解してくれなかったから、さあ、ルビーはどうするの?

お金がなくとも、奨学金をもらえれば何とかルビーは一人でパークリー音楽大学に入学できるはず。しかし、そうなれば、3人だけで残されるろう者家族はどうなるの?コーダのルビーがいなくなれば、新たな通訳はどうするの?それを雇う余裕があるの?家業のトロール漁業は維持できるの?そんな現実の中、ルビーの選択は?

■□■トロール漁業と販売方式の構造改革は?その戦いは?■□■

ルビー一家のトロール漁業は代々続いてきた家業だが、本作冒頭に提示される問題点は、政府が課した新たな漁獲制限とそれを遵守するための監視員の同乗問題。漁師の生活は今でもギリギリなのに、そんなことになれば新たな経費が増えるだけで、生計が一層苦しくなることは明らかだ。したがって、漁師たちはそれに断固反対!さらに取った魚を大手の販売業者に安く買いたたかれている漁師たちにとって、漁師だけの協同組合を立ち上げて自ら販売することができれば、余計な搾取を逃れることができる。理屈はその通りだし、現にそれは一度試みられたが失敗したらしい。しかし、時代が変わり、新たに困難な状況が生まれている昨今、再度、漁師協同組合の結成を!漁師たちの会合でそう訴えたのは何とフランクだったからビックリ!

もちろん、それを通訳したのはルビーだが、事態がそんな方向に進んでいくと、通訳係ルビーの仕事は飛躍的に増えていくことに。そんな中、進学を巡って家族との論争に疲れたルビーが仕事をサボり、マイルズとのデートに出かけたのは責められない。そのデートによってルビーとマイルズの仲が“復活”したのは喜ばしいが、通訳のいないトロール船を、フランクが監視員が同乗する中で操業したため、「無線に対応できる健聴者の同乗がなければ免許停止」というとんでもない処分を受けることに。

そんな苦境の中、ルビーは「私が残る」と表明。そんな決断に両親は喜んだが、レオは「家族の犠牲になるな!」と怒りの声を!さあ、新たに勃発したそんな事態を受けて、ル

ビーの選択は？

■□■『青春の光と影』をこんな場面で聴こうとは！■□■

学生運動に明け暮れた私の大学時代の音楽は、一方では、ラジオの朝日放送ラジオ（ABCラジオ）で深夜に放送される“ABCヤングリクエスト”だったし、他方では、仲間と集まりギターを弾きながら歌うフォークソングだった。その代表曲は、ジョーン・バエズの『勝利を我等に』や『ドナドナ』等だったが、他方、『青春の光と影』の旋律とその歌詞は今でもはっきり覚えている。

本作中盤では、ルビーがマイルズと2人で歌う『You're All I Need To Get By』が何度も流れるが、ルビーがパークリー音楽大学のオーディションで選んだ曲は、ジョニ・ミッチェルが歌った『Both Sides Now』（邦題：青春の光と影）。V先生がピアノ伴奏を買って出たり、それが許可されたりするのは異例だし、立ち入り禁止のはずの観客席にルビーの家族が座り込むのも異例。ルビーの歌声は当初こそ緊張に震えていたが、ピアノ伴奏に乗ってくると、そしてまた家族への手話を交えて進んでくると、私の目には大粒の涙が……。 “音楽モノ”に感動することが多い私だが、コーダという言葉を本作で初めて知ったくらいだから、“手話を通じた音楽モノ”は本作がはじめて。なるほど、これは単なる「お涙ちょうだいもの」ではなく、アカデミー賞作品賞にふさわしい名作だ。

もっとも、パークリー音楽大学への入学はあくまで“出発点”だから、ルビーは入学後すっかり頑張らなくちゃ。私も1967年4月に大阪大学法学部に入学した時の高揚感は今でもはっきり覚えているから、これからパークリー音楽大学に向かうルビーにはしっかり声援を送りたい。

2022（令和4）年4月14日記